

文久2年絵図『西彼杵郡三重村賤津村黒崎村永田村図』からみた
キリシタン集落の地域特性について

村田 明久*

Analysis of the Local Characteristics of Hidden Christian Villages
Using an illustrated Map of Sotome Published in 1862

MURATA Akihisa

Summary

About Christian colonization, I got the following knowledge by using an illustrated Map of Sotome Published in 1862 for local analysis newly this time.

- (1) After distinguishing the territory of Saga feudal clan and the Omura feudal clan, and analyzing a village, there were many unities with the graveyard and was formed in the small village in the Saga feudal clan, and there were few graveyards, and it became clear adversely in the village in the Omura feudal clan to have been formed in the large graveyard in a mass.
- (2) The number of the houses per 1 graveyard in the Saga territory in the illustrated map became an average of 6.1. In the village of the illustrated map, I was able to confirm two village condition of the unit village of 1 graveyard with five houses・ten houses and the middle scale village of the scale graveyard with 20 houses・30 houses.
- (3) It is considered that the Christian graveyard of the Saga territory enclave was formed based on private land and a group.
- (4) In the Omura territory around the Saga territory enclave, it is thought that a burial method performed in old Saga territory spread after the Meiji era.

Keywords : (**Hidden Christian village, local characteristic, Graveyard, Sotome**)

* 環境・建築学部建築学科 教授
2011年 3月29日受付
2011年 6月20日受理

1. はじめに

西彼杵半島外洋側に面する外海地域は、かくれキリシタンの里として、キリスト教に関連するオラショなどの信仰生活を続けてきた地域として知られる。当該地域は黒崎・出津の旧佐賀藩飛地が存在し、佐賀領と大村領が隣合い入り組んで地域が形成されてきた歴史がある¹⁾。大村藩では旧神浦村地域が光照寺（真宗、神浦）、旧黒崎村地域が正林寺（真宗、三重）で、佐賀領飛地は天福寺（曹洞宗、檜山）が管轄し、旧外海町の黒崎、出津はこれらの寺院に直接隣接することなく離れた地域にあった。

これまでかくれキリシタンの民俗調査は行われたが²⁾、習俗研究等の無形的なレベルにとどまっていた。これらの地域解明は多難で、僻遠の地、宗教性、宣教師報告の存在、かくれキリシタンの秘匿性と衰退など多々あげられる。ここでは文化的景観地域の数少ないキリシタン集落遺構としてとらえ、中でも墓地に着目し、キリシタン集落の地域特性について考察を進めた。新たな新資料から、描かれた墓地の分布、配置、所有形態などを考察し、キリシタン集落形成の特性を述べた。

大正七年九月編纂『西彼杵郡黒崎村郷土誌』によると、黒崎村の第3章第1節冠婚葬祭の葬儀の項に、宗教上よりおよそ基督教、仏教、禅宗に分れたるとあり、禅宗として次のように説明されている。ここでは、葬儀の上で寺院もなく宣教師もない近世キリシタン集落が置かれた状況がうかがえる。

他ニ稀ナル本村独特ノ自称禅宗ナルモノ三百有余戸アリ徳川時代禁教前ハ旧教信者ニ属セシモノニシテ基督教厳禁ノ制アリテヨリ陽ニ禅宗ニ転ジタルモノノ如ク外ヲ装ヒ内心密カニ基督教ヲ信ジ来リシモノニシテ実ハ旧教固宗（執の誤りか）派トモ云フベキモノナリ此等ハ維新後宗教ノ自由ヲ許サルルモ以前ノ儘ノ習慣ヲ守リ一定ノ寺院モナケレバ之ヲ導ク宣教師モナク只古老ノ此道ニ詳シキモノヲ選ビ信者ノ頭トナシ葬儀ノ事ヨリ余事ニ至ル凡テノ事ヲ行ハシムルモノナリト云ヘリ³⁾

禅宗とした理由の記述はないが、旧佐賀領である深堀の曹洞宗・菩提寺の末寺である天福寺が地域を管轄したためであろう。また、キリスト教徒の墓は寝棺だが、その他の教徒の墓は座棺の中にあって、禅宗（曹洞宗）も

同じく寝棺であった。

2. 墓地の資料

墓地解明の手掛かりとした分析資料の概要は次の通りである。これら二つの資料から、外海町における近世と近代の墓地の推移について検討した。

・資料1 『西彼杵郡三重村賤津村黒崎村永田村図』⁴⁾
文久2年壬戌夏仕立（1862）

・資料2 『地籍図』⁵⁾ 明治中期

資料1は、大村領内にあった佐賀藩深堀氏の飛地である賤津（出津）村、黒崎村、永田村の絵図で、現在の外海町に当たる部分が描かれている。紙幅250×242cm、彩色仕上げの1舗で、著者は不明。年代は「文久2年壬戌夏仕立」とある。

平成20年8月の外海文化的景観地域策定の大村史料調査で、資料1を発見したのだが、絵図の縮尺は「壹町式寸」つまり1800分の1で、当該図は現在の地形図と重ねることができるほどの高精度な測量図であることから痕跡調査を可能とした。キリシタン地域の解明に一石を投じられると思われる。屋敷、家屋、道が配置されて集落が描かれ、灰色着色で「ハカ」と墓地が記され、現在の集落・墓の位置と絵図に描かれた位置がほぼ一致した。これまで近世期集落を語る具体的資料がなかっただけに、資料1の集落・墓地のある地区は、キリシタン集落やキリシタン墓地が表現された絵図と捉えることができる貴重な資料である。この根拠としては、昭和時代までかくれキリシタンの組織が多数維持されてきたこと、佐賀領ではキリシタン迫害が厳しくなかったらしいこと、絵図製作年（文久2年）が信徒発見（慶応元年）以前であることが主な理由である。

この絵図の効用はキリシタン墓の特定⁶⁾など様々あるだろうが、ここではキリシタン集落の家屋、墓地の解析に用いた。この資料1は佐賀領（深堀領）の絵図であるので、大村領はほとんど省略されている。

もう一つ、資料2の外海町の『地籍図』がある。字（あざ）図は地目別に彩色され、地番、地目、所有者、規模について情報が得ることができた。各字図のうち、西出津郷小田平の字図で出津教会地が形成され、東出津郷野道の字図で野道教会墓地が形成されていないことから、明治12年～明治31年に作成されたものであろう。

なお、今回の分析で使用した同様の郷区分や字名については、明治15年6月『肥前国西彼杵郡各村字調』⁷⁾に記入されたものを使用した。



図1 文久2年(1862)の『西彼杵郡三重村賤津村黒崎村永田村図』長崎歴史文化博物館収蔵

表1 墓地の分布数(外海町、文久2年)

郷名	字数	家屋数A (箇所数)	墓地数B (箇所数)	家屋数/墓地数 A/B
下黒崎郷	43	185	34	5.4
上黒崎郷	54	0	1	0.0
西出津郷	23	128	15	8.5
東出津郷	16	57	11	5.2
永田郷	30	35	6	5.8
赤首郷	13	3	0	—
牧野郷	37	—	—	—
計	216	408	67	6.1

表2 墓地の分布数(外海町、明治中期)

郷名	字数 佐賀/大村	家屋数A (地所数)	墓地数B (地所数)	家屋数/墓地数 A/B
下黒崎郷	41/2	344	59	5.8
上黒崎郷	3/51	78	14	5.6
西出津郷	19/4	236	28	8.4
東出津郷	8/8	136	16	8.5
永田郷	6/24	156	11	14.2
赤首郷	0/13	52	2	26.0
牧野郷	2/35	129	2	64.5
計	79/137	1131	132	8.6

3. 佐賀領と大村領の集落の違い

3.1 家屋と墓地の分布

外海地域における黒崎川、出津川の流域における各郷(下黒崎郷、上黒崎郷、西出津郷、東出津郷、永田郷、赤首郷、牧野郷)を対象とし、上記の二つの資料により、文久2年と明治中期の家屋数、墓地数を求め、表1、表2とした。なお、精度の高い資料1と地形図を重ねることで藩境、字境の区切りができ、墓地がどちらの藩領に属するかの判別を可能とした。

佐賀領飛地があるこの地域は、同じ郷内に佐賀領と大村領が存在した。字数の割合で見ると、佐賀領と大村領の割合は表2のようになり、佐賀領の字が多いのは下黒崎郷、西出津郷、大村領の字が多いのは上黒崎郷、永田郷、赤首郷、牧野郷で、東出津郷は半々というように、藩領の割合にかなりの差が生じた。

文久2年当時の佐賀領では、表1により、家屋数は下黒崎郷に185ヶ所、上黒崎郷に0ヶ所、西出津郷に128ヶ所、東出津郷に57ヶ所、永田郷に35ヶ所、赤首郷に3ヶ所の計408ヶ所が存在した。また墓地数は下黒崎郷



図2 外海地域

に 34 ケ所、上黒崎郷に 1 ケ所、西出津郷に 15 ケ所、東出津郷に 11 ケ所、永田郷に 6 ケ所、赤首郷に 0 ケ所の計 67 ケ所が存在したことが確認できた。これにより、黒崎、出津、永田という序列で定住地が形成されたこと、家屋が集まるところは墓地も同様に集まっていたことが認められた。要するに、近世末のこの地域では、家屋に対する墓地の数が多き状態で集落が形成されていたとみられる。

資料 2 は、明治中期の字別の地域全域資料で、旧佐賀領だけでなく旧大村領についても、字別に宅地、墓地の資料を得ることができた。表 2 により、家屋数（地所数）は下黒崎郷に 344 ケ所、上黒崎郷に 78 ケ所、西出津郷に 236 ケ所、東出津郷に 136 ケ所、永田郷に 156 ケ所、赤首郷に 52 ケ所、牧野郷に 129 ケ所の計 1131 ケ所が存在した。また墓地数（地所数）は下黒崎郷に 59 ケ所、上黒崎郷に 14 ケ所、西出津郷に 28 ケ所、東出津郷に 16 ケ所、永田郷に 11 ケ所、赤首郷に 2 ケ所、牧野郷に 2 ケ所の計 1131 ケ所が存在したことが確認できた。ここで墓地当りの宅地数をみると平均 8.6 となった。佐賀領のみの場合の資料 1 と異なり、大村領が加わったことで、各郷の値は 5.6~64.5 とかなりのばらつきがみられた。大村領の牧野郷では、墓地は 2 ケ所にまとめられ、1 墓地当りの宅地地所数は 64.5 で大規模な墓地であった。逆に大村領の家屋のない下黒崎郷では 5.8 となり、両者には 11.1 倍もの差があった。

『郷村記』によれば、1870 年頃の黒崎村人口 1457 人（大村領のみ）のうち、法華宗 29 人、真宗 428 人であった⁸⁾。このように大村藩は当然、禅宗でなく、大部分が真宗であったとみてよい。したがって、墓地形成の違いは宗教の違いが表面化したものと解せられよう。

以上のように二つの資料から、佐賀藩では家屋数に対し墓地数が多く形成され、逆に大村藩では墓地数が少なく大墓地としてまとめられ集落形成されたことが明らかとなった。これは絵図を詳細に分析することで、集落における墓地のあり様が両藩で顕著に異なっていたと指摘できたことである。現在でもなお集落景観に見られることである。

表 1 と表 2 から、明治維新前後の墓地当りの家屋数 (A/B) を比較すると、幾つかの興味ある知見がある。まず、2 つの資料を比較すると、下黒崎郷で 5.4 と 5.8、西

出津郷で 8.5 と 8.4 となり、いずれも近い値である。また表 2 では、旧大村領でありながら上黒崎郷で 5.6 となり、旧佐賀領（下黒崎郷 5.4、東出津郷 5.2、永田郷 5.8）に近い値となった。これらは家屋 5 戸当り 1 ケ所の墓地がある計算となり、単なる偶然と思えない一致ぶりである。資料 1 を検討すると、家屋数はほぼ 5 戸~10 戸でまとまり小集落を形成していた。

旧大村領の地が増える地区では大きな墓地としてまとめられ、永田郷 14.2、赤首郷 26.0、牧野郷 64.5 と値は高まった。集落の殆んどが大村領の牧野郷では 64.5 で、共有墓地が 2 ケ所である。牧野の 2 墓地のうち紀年が確認できる最も古い墓碑は、尾崎墓地で宝暦 12 (1751) 年、牧野墓地で安永 8 (1779) 年であるので⁹⁾、江戸中期に牧野郷の墓地はすでに存在していたようである。

3.2 墓地の所有形態

表 3 は、資料 2 に掲載の墓地について、共有・私有の所有形態別にわけ、藩領別に示したものである。

明治中期になると下黒崎郷の共有地の数が大きいこと、大村藩領で私有地の墓地が存在していたことが指摘できる。両藩を合わせると、下黒崎郷は共有 31、私有 26、不明 2、上黒崎郷は共有 2、私有 12、西出津郷は共有 5、私有 23、東出津郷は共有 1、私有 15、永田郷は私有 11、赤首郷は私有 2、牧野郷は共有 2 であった。共有地は例えば下黒崎郷共有というように郷の共有地、カトリック教会の共有地があった。

旧佐賀領の墓地のうち、ほとんど変化のない東出津郷、永田郷では、江戸から明治へ継続されたものはすべて私有墓地である。東出津郷で共有墓地が一つできたが、こ

表 3 墓地の所有形態（外海町、明治中期）

郷名	旧藩領	共有	私有	不明	計
下黒崎郷	旧佐賀領	31	26	2	59
上黒崎郷	旧大村領	2	12	0	14
西出津郷	旧佐賀領	4	20	0	24
	旧大村領	1	3	0	4
東出津郷	旧佐賀領	1	13	0	14
	旧大村領	0	2	0	2
永田郷	旧佐賀領	0	5	0	5
	旧大村領	0	6	0	6
赤首郷	旧大村領	0	2	0	2
牧野郷	旧大村領	2	0	0	2
計	旧佐賀領	36	64	2	102
	旧大村領	5	25	0	30

れは明治31年完成の野道教会墓地であった。また下黒崎郷、西出津郷では、文久2年、明治中期のいずれの資料にも私有墓地があり近世期からの継続のようである。明治中期の旧佐賀領では稠密地の下黒崎郷、西出津郷で共有墓地が数多く形成されていた。下黒崎郷において全数59のうち共有は31、そのうち既設が24、西出津郷では24のうち共有は4、そのうち既設が3で、共有墓地は下黒崎郷で高い割合を示した。このことから旧佐賀領では、近世期（文久2年）にあった既設墓地を優先して共有墓地としたと考えられる。

旧大村領の墓地をみると、牧野郷の墓地は大きな共有地のみで私有地はない。永田郷、赤首郷はいずれも私有地のみである。

明治以後、佐賀領飛地周辺の大村領においても、小さな単位で集まる旧佐賀領同様の私有地による墓地形態がみられた。近世末に大村領でキリシタン墓地はできなかつたであろうから、おそらく明治以降になって、旧佐賀領での埋葬方法が飛地周辺の大村領に伝播したものと推測される。

墓地の埋葬に私有地以外に「組」の関わりがあったことが、『外海町誌』での墓地の記述からうかがえる。

旧藩当時、下黒崎、出津の佐賀領内の墓地は私有地または里組、中組など、それぞれの組で埋葬した関係もあって点在しているが、大村領分の墓地は共同墓地として構築されてある¹⁰⁾

4. 近世のキリシタン集落の構成

前項において、近世の佐賀領飛地と周囲の大村領とでは、家屋、墓地の集まる集落のでき方が著しく異なっていたことを、両藩を比較し領域的に明らかにした。次に、資料1の墓地67ヶ所を対象に、佐賀領の集落構成について検討した。まず、墓地と間近の集落との関係について、集落の中、集落の上、集落の下、集落の向いにおいて集

落をとらえ、次に、墓地の場として、辻道型、屋敷型、畑地型、林地型、海崖型にわけると、家屋と墓地を関連付け、表4を作成した。

これによると、7割程度の集落で、家屋が集まる居住地の上方に間近の墓地が形成されていた。そこでは、林地、辻道、畑地で墓地が見出され、わずかに海崖にもあった。次は、居住地内に墓地がある集落が2割程度あり、主に辻道、屋敷、林地に墓地が設けられた。他に、集落の下方に墓地を設けた例が林地にあった。

林地が切り拓かれて畑となり、家屋ができて、集落間の道ができ集落が形成される過程を考えると、佐賀領飛地内では集落形成過程のさまざまな段階で墓地が形成されていた。山間地域において、集落は主要幹線沿い、または下段から上段へと土地が切り拓かれ形成されたであろうから、時代が進むにつれ家屋や墓地の立地環境は林地→畑地→辻道へと変化したと推定される。資料1に見られる家屋墓地の分布から、集落の成長過程で形成したとみられるキリシタン集落を挙げると、次のように開き型集落、林地型集落、畑地型集落、連担型集落、辻道型集落の5種類となった(図3～図7)。

・開き型集落

林地が新たに切り拓かれ、畑地、家屋ができ、集落形成された初期段階で、近在にまだ墓地が形成されていないもの。例えば、西出津郷字内平の事例では、林地に道が通され带状に幾つかの畑地が開拓され、主要地に家屋が建てられた。集落形成が行われているが近在に墓地はつくられていない。

・林地型集落

集落が林地で囲われ防風林の役割を果たし、林地あるいは海崖の一角に墓地が形成されたもの。例えば、下黒崎郷字河内谷の事例では、畑地が道沿いに開かれて防風林を形成し、林地を抜けて道は次の集落とつながる。中に家屋が点在し、上手の林地の一角に墓地がつけられた。

・畑地型集落

耕作した畑地がひろがって集落周り、墓地周りの林地が減少し、畑地の一角に集落と墓地がそれぞれ立地したもの。例えば、西出津郷字畑杭の事例では、川沿いの林地はわずかで、畑地に道が形成され集落ができ、上方の畑地の一角に雑木林と墓地がある。

表4 集落の立地（外海町、文久2年）

墓地の環境 集落と墓地	辻道型	屋敷型	畑地型	林地型	海崖型	計
内部	7	3	1	3	0	14
上方	15	0	10	21	2	48
下方	0	0	0	4	0	4
向い	0	0	0	1	0	1
計	22	3	11	29	2	67

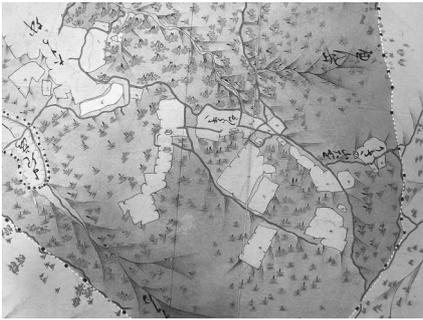


図3 開き型集落



図4 林地型集落

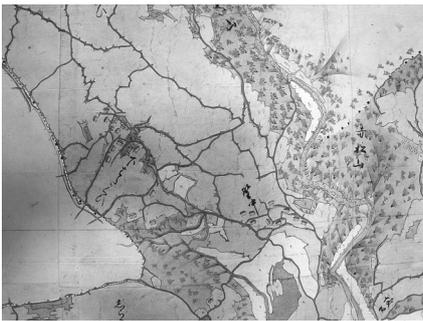


図5 畑地型集落



図6 連担型集落

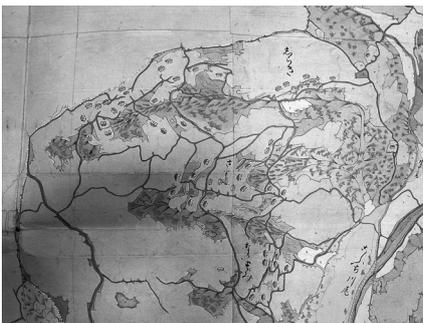


図7 辻道型集落

・連担型集落

集落内の道の一角に墓地がまとまり、幾つかの集落墓地が横に連結したものの。例えば、下黒崎郷字前田・迫の事例では、畑地と屋敷地の集まりで、集落内は縦道と横道で形成され、縦道の上方に墓地があり、これらが幾つか横方向に連結して稠密地を形成する。

・辻道型集落

山間の集落をつなぐ横と縦の道が交差し、辻や道の一角に墓地が形成されたもの。例えば、西出津郷の字白木・菖蒲田、東出津郷の字横道・井手ノ上の事例では、集落間をむすぶ眺望の良い中腹地に墓地が形成されている。

このようにキリシタン集落は、家屋が 5~10 戸の小集団が形成され、集落上手に小墓地が配置されるという基礎的な単位集落を形成していたとみられ、林地型集落、畑地型集落、連担型集落が該当した。さらに家屋群が 20~30 戸の中集団が形成され、集落上手に中墓地が配置される中規模クラスのものもあり、辻道型集落が該当した。

5. まとめ

外海地域のキリシタン集落において、今回、新たに文久 2 年絵図『西彼杵郡三重村賤津村黒崎村永田村図』を地域の解析に用いることで、キリシタン集落形成に関して次のような知見を得た。

(1) 佐賀藩と大村藩の領地を区別して集落を分析したところ、佐賀藩では小集落に墓地のあるまとまりが多く形成され、逆に大村藩では集落に墓地が少なく大墓地にまとめて形成されたことが明らかとなった。

(2) 絵図における佐賀領での 1 墓地当りの家屋数は平均 6.1 となった。絵図の集落において、5 戸~10 戸で 1 墓地のある単位集落と、20 戸~30 戸で 1 つの中墓地のある中規模集落が確認できた。

(3) 佐賀領飛地のキリシタン墓地は、私有地と組をもとに形成されたとみられる。

(4) 佐賀領飛地周辺の大村領では、明治以降、旧佐賀領で行われていた埋葬方法が波及したとみられる。

脚注

- 1) 『外海町誌』外海町役場 1974年 102頁～103頁
- 2) 『長崎県文化財調査報告書第153集 長崎県のカクレキリシタン』長崎県教育委員会 1999年
- 3) 『西彼杵郡黒崎村郷土誌』黒崎尋常高等小学校 1918年 24頁～25頁
- 4) 『西彼杵郡三重村賤津村黒崎村永田村図』文久2年壬戌夏仕立 長崎歴史文化博物館収蔵
- 5) 『地籍図』外海町役場
- 6) 長崎市多良で禁教時代のキリシタン墓碑群64基が見つかる(2011年12月24日西日本新聞・読売新聞、2012年1月20日朝日新聞)
- 7) 『肥前国西彼杵郡各村字調』明治15年6月 長崎歴史文化博物館収蔵
- 8) 「竈数男女数並宗旨分之事」『大村郷村記 第六巻』所収 国書刊行会 1982年 92頁
- 9) 『長崎市外海の石積集落景観保存調査報告書(資料編)』長崎市 2012年 233頁・241頁
- 10) 『外海町誌』外海町役場 1974年 574頁

参考文献

- ・田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』国書刊行会 1978年
- ・『外海町誌』外海町役場 1974年

謝辞

この研究は、平成23年度～平成25年度の学術研究助成基金の基盤研究(C)「禁教時代のキリシタン集落形成に関する研究」の一部である。また、紀要の本研究論文のため査読いただいた先生方に、この場を借りて感謝申し上げます。